

研究室だより

人事

周香織助手、三月三十一日附けで退職。

(二年間であったが、本当に学科のために尽力してくれた。)

訃報

昭和五十二年四月より平成七年三月まで十八年間にわたり本学に奉職され、本学文学部長、実践女子大学・実践女子短期大学学長を歴任された分銅惇作先生が、平成二十一年一月二十九日、八十四歳でお亡くなりになりました。

先生は漱石・鴎外の研究から出発され、詩人千家元麿に親炙されるとともに、戦後は同郷の作家伊藤永之介、金子洋文らと「社会主義文学」を創刊して活躍。「種蒔く人」の研究・顕彰をはじめ、大正・昭和期を中心とする近代詩・詩人論などの多くの研究を重ねられ、とりわけ、深い法華経理解に根ざした宮沢賢治論は他の追随を許さぬ達成を示されました。

気さくなお人柄で多くの学生を教導するとともに、大人

の風格をもって国文学科を牽引されました。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

特別講演会開催

平成二十年度 第一回国文学科特別講演会

平成二十年十一月二十二日(土) 午前十一時～十二時

本館41教室(AVホール)

「源氏物語」と「新古今」の歌人たち

久保田淳先生(東京大学名誉教授、日本学士院会員)

平成二十年度 第二回国文学科特別講演会

平成二十年十二月十日(水) 午後二時四十分～四時十分

香雪記念資料館 1階大教室

古代の残留と顕現 ―日本・琉球・韓国への時空を越

える旅―

伊藤好英先生(慶應義塾高校教諭・明治大学講師)

大学院研究会開催

平成二十年度後期大学院文学研究科国文学専攻研究会

平成二十年十一月二十九日(土)

午後二時～五時

I館111教室

大伯皇女研究―『万葉集』卷二相聞部所載歌の表現―

博士前期課程二年 伊藤好美

仮名遣いから見た『春色梅児誉美』『春色辰巳園』―
「故」「参」の場合―

博士後期課程二年 木川あづさ

古事記における名と称 助教 植田麦

今回は博士前期課程・博士後期課程・教員からそれぞれ
一名ずつの発表となった。冬の訪れも感じる一日ではあつ
たが、議論は白熱した。院生諸姉は今後の研究にとつて大
きな糧となったことであろう。

〈編集後記〉

平成の御世も、はや廿年を閲し、愚生も勤続二十年の表
彰を受けた。歳歳年年人同じからず、数々の学生を送り出
したが、朦朧として昨年卒業したゼミ生の顔さえ定かでない。
代悲白頭翁の「代」がとれてしまった身に、これ昔紅
顔の美少年の面影は遠い。せめて『実践国文学』編集長は
老を送るの職とらんか。(影山輝國)

平成二十年度後期号にあたる第七十五号をお届けします。
先号より、国立情報学研究所の研究紀要公開支援事業に参
加し、本誌をpdfデータにして、インターネット上で公
開をしています。今号以降も同様に、オンラインで読むこ
とができるようになります。とはいえ、媒体が変わっても
情報そのものの価値が下がるわけではありませんが、眼光
がモニタの背に徹することは難しそうです。

(植田麦)